

Amami Station, Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

とうしよけんぶんしつ
島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 2

2016 年 3 月

奄美分室設立一年を振り返って（河合 溪） p2

研究紹介（藤井琢磨、鈴木真理子） p3

活動報告 p4

学生島体験！「奄美調査の憂鬱と期待」（石貫泰三） p8





奄美分室設立一年を振り返って

河合 溪（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長）

平成 27 年 4 月 25 日に国際島嶼教育研究センター奄美分室の設立式典を奄美市において開催しました。当日は、多数の来賓を代表して朝山毅奄美市長、鮫島秀久鹿児島県大島支庁総務企画部長、保岡興治衆議院議員よりそれぞれ祝辞をいただきました。一年前に国際島嶼教育研究センター奄美分室の設立の準備をはじめ、その間には非常に多くの方のご理解とご協力を得てたどり着いたということで、私にとっては非常に感慨深い一日でした。



奄美分室設置記念式典（2015 年 4 月 25 日）

国際島嶼教育研究センター奄美分室設立に関しては奄美市に多大なるご協力をいただきました。奄美分室の施設も奄美市にご提供いただきました。奄美分室は奄美市の中心にある水道課の建物の一室にあります。これはより多くの方に気楽に利用していただきたいということで、なるべく町の中に設置をさせていただきました。

この奄美分室設立に伴い、この奄美分室を強化し世界遺産へ向けた教育研究を行なうために、平成 27 年度文部科学省特別経費（プロジェクト）「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育拠点形成」が採択されました。このプロジェクトは学内の 40 数名の教員と共に推進しています。このプロジェクトでは、藤井琢磨特任助教と鈴木真理子プロジェクト研究員が採用され、奄美分室

に常駐することになりました。最初の予定では、島嶼研の専任教員の 4 名が交代で 1 名が常駐するはずでしたが、2 名の常駐者が増えたことで、事務補佐員と共に 4 名でより一層活発な活動を行っています。

平成 27 年度の奄美分室の具体的な活動として、上記プロジェクトとの共催で、一般市民を対象にした干潟（平成 27 年 9 月 26 日）や森林（平成 27 年 12 月 23 日）の観察会や様々なテーマでの研究会等を開催しました。そして、プロジェクトの総括であるシンポジウム「生物多様性シンポジウム—奄美群島の生物多様性：その魅力を再発見—」を平成 28 年 2 月 21 日に共催しました。このプロジェクトは平成 27 年度末に一旦終了しますが、平成 28 年度から四年間同様のプロジェクトを実施する予定です。

平成 27 年度は、設立初年度に関わらず地域の方のご理解を得て、そして常駐スタッフの努力もあり、設置してから多くの方に訪問していただきました。今後も地域に密着し、多くの市民や研究者が気楽に立ち寄れる施設として活動していきたいと思っています。そして、奄美群島を中心とした鹿児島県島嶼を対象に教育・研究、そして地域貢献を推進していきたいと考えています。



奄美分室内部の風景

奄美分室を利用した研究の紹介

奄美大島周辺海域における六放サンゴ類の多様性に関する研究

藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター特任助教）

奄美大島は大規模なサンゴ礁が発達する北限に近いうえ、横断する黒潮によって隔たれたトカラ列島以北とは海洋生物相が大きく異なると考えられています。しかしながら奄美大島周辺海域にて十分な海洋生物多様性調査が行われた例はなく、我が国における一連の生物相を把握する上で大きなギャップの一つとなっています。サンゴ礁生態系において重要な生産者としての役割を担うイシサンゴ目や、同じく六放サンゴ亜綱に属し、生態系の中でイシサンゴ目と近い役割を担うスナギンチャク目やイソギンチャク目を主たる対象に、奄美大島周辺海域における六放サンゴ相の記録を行ってきました。

奄美分室設立後、一年間で約 60 回の潜水調査を行い、約 70 点の六放サンゴ類標本作製しました。奄美大島周辺浅海生態系の大きな特徴は、深く切れ込んだ海岸線が作り出す多くの内湾環境です。これら内湾環境からは、他の海域では

希少、かつ深い水深に形成されることが多いセンベイサンゴ属群落が、15m 以浅の浅い水深帯に大規模に広がることを確認されました。その他にも、奄美群島からは分布が確認されていない砂泥底性単体サンゴや非固着性イソギンチャクが見つかるなど、奄美大島周辺内湾環境には特異な六放サンゴ相が存在する可能性が示唆されました。内湾環境以外でも、過去の調査では分布が確認されていなかったスナギンチャクの一種が確認されるなど、これまでの奄美大島周辺における六放サンゴ相の把握が不十分であることが示唆されています。ツノサンゴ目やホネナシサンゴ目については国内の分布情報は極めて不足しており、基礎的な調査が求められています。

今後、調査ポイントを増やして更なる潜水調査を行うとともに、標本および分類学的精査にもとづく六放サンゴ相の記録と報告を進める必要があります。

林道の観光利用によるアマミノクロウサギ（*Pentalagus furnessi*）への生理・行動への影響評価

鈴木真理子（鹿児島大学国際島嶼教育研究センタープロジェクト研究員）



センサーカメラに写ったアマミノクロウサギ

野生動物を間近に観察する自然体験系エコツアーリズムは、環境教育や自然保護の観点からだけでなく、観光における集客力としても注目されています。奄美大島でも近年、ナイトツアーをはじめとして、希少種であるアマミノクロウサギなどの夜行性の動物を観察するために夜間の林道利用が増えています。このような観光利用がアマミノクロウサギの生態にどの程度影響があるかを調べるため、ストレスレベルのモニタリングと行動調査を行いました。2015 年 8 月から 12 月まで

ナイトツアーに利用されている林道において、ストレス評価のためにアマミノクロウサギの糞便サンプリングを行うとともに、センサーカメラを設置してアマミノクロウサギの林道への出没頻度を調べました。ストレスレベルは糞便に含まれるストレスホルモンの一種、コルチゾルの濃度を測定し、同時に個体識別のために糞便から抽出した DNA の解析を行いました。比較のため、ナイトツアーに利用されていない場所でも同様の調査を行いました。

一晩に出現した糞塊数は先行研究のとおり季節変化があり、夏に少なく秋から冬にかけて増加する傾向が見られました。糞便試料は全調査区あわせて 791 糞塊分を採取しました。糞便試料からはコルチゾルが検出可能であることが確かめられました。また、センサーカメラの映像を分析したところ、アマミノクロウサギの出没は日没から日出までに限られており、特に 20 時台と 3 時台にピークが見られました。今後、ストレスレベルの季節変化、個体差、交通量との関係を調べるとともに、調査区による比較を行う予定です。

奄美分室の活動報告(2015年10月～2016年2月)

<シンポジウム・講演会等>

・奄美の明日を考える奄美国際ノネコ・シンポジウム

2015年12月6日(日) 13:30～16:30、奄美観光ホテルにて

基調講演 1「世界自然遺産登録に向けた現状と外来種対策」鈴木祥之(環境省奄美野生生物保護センター)

基調講演 2「ニュージーランドの外来種対策」Al Glen(ニュージーランド保全管理研究所)

報告「奄美大島のノネコに関する聞き取り調査結果と鹿大・奄美分室の取り組み」

鈴木真理子(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

報告「ノネコ問題を考える視点と鹿大・鹿児島環境学研究会の取り組み」

小栗有子(鹿児島大学かごしまCOCセンター)

パネルディスカッション「奄美の明日を語る」

パネリスト: 久野優子(奄美猫部)、阿部優子(奄美哺乳類研究会)、深田小次郎(しまブログ)、久保駿太郎(鹿児島県立大島高等学校)、村松 健(ピアニスト)、星野一昭(鹿児島大学かごしまCOCセンター)

ノネコ・シンポジウムに参加しての感想

久保駿太郎(鹿児島県立大島高等学校一年)

今回、ノネコ・シンポジウムに向けてミーティングをしたり、講話を聞いたり、まとめや調べ物などの準備をしたりすることで、今まで苦手としていたネコと一緒に暮らしたいとまで思えるようになりました。思い返せば五ヶ月前、鹿児島大学国際島嶼教育センター奄美分室の鈴木真理子さんから「ノネコ・シンポジウムに参加しませんか。」と言われ、あまり深く考えないままノネコ・シンポジウムへ参加することを決めました。僕は、当日までネコに

ついて勉強していたものの、ノネコ・シンポジウムが始まるまでとても緊張した日々を送っていました。いざノネコ・シンポジウムが始まり、コーディネーターである鹿児島大学かごしまCOCセンターの星野一昭先生と、他のパネリスト4名の方のやりとりを聞き、今まで以上にノネコ問題を解決しなければならないと思いました。一つ一つの質問に対してよく考えて発言し、環境省をはじめとする行政の方々に自分の意見を伝えることができたと思います。十年後、二十年後の奄美が、人と在来種、そしてネコと幸せに暮らせるような島になるよう協力していきたいと思っています。

・生物多様性シンポジウム「奄美群島の生物多様性：その魅力を再発見」

2016年2月21日(日) 13:00～17:00、名瀬公民館金久分館にて

開催の辞 住吉文夫(鹿児島大学理事)

講演「湯湾岳の希少植物」山下 弘(植物写真家)

「オキナワウラジロガシンの維持機構」鶴川 信(鹿児島大学農学部)

「地域資源としての奄美の海洋生物」興 克樹(奄美海洋生物研究会)

「奄美群島の藻類・海草類と生育環境」寺田竜太(鹿児島大学水産学部)

「なぜオオトラツグミを守るのか：希少種と生物多様性の保全を考える」

水田 拓(環境省奄美野生生物保護センター)

「人間とあまぐろの交差点：野生動物の観光利用を考える」

鈴木真理子(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

コメント「生物多様性と人間の関わり：先史時代と現代」

高宮広土(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)、鈴木祥之(環境省奄美野生生物保護センター)

パネルディスカッション「近世から近代の先人達が奄美群島の生物多様性とどのように関わってきたか」

司会：藤井琢磨(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

パネリスト：上記講演者、桑原季雄(鹿児島大学法文学部)、大海昌平(奄美両生類研究会)



奄美国際ネコ・シンポジウム
(2015年12月6日)



特別セミナー (2015年11月7日)

<セミナー・観察会等>

- ・特別セミナー「新種がいっぱい?!サンゴ礁の小さな生きものたち」
2015年11月7日(土) 15:30~18:00、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて
「寄生生活っていいな、カイアシ類」上野大輔(鹿児島大学理工学研究科)
「サンゴ礁を彩るゴカイ達」自見直人(広島大学生物圏科学科)
「海底に潜む小さなドラゴン?動噴動物」山崎博史(琉球大学理工学研究科)
「ちょきちょきタナイス」角井敬知(北海道大学理学部)
「奄美はコケムシの楽園」広瀬雅人(東京大学大気海洋研究所)
「南の島のムシモドキ、皆々様大集合!!」泉 貴人(東京大学理学系研究科)
「黒船が持ち帰った、奄美大島のイソギンチャク」柳 研介(千葉県立中央博物館分館海の博物館)

若手海洋生物多様性研究者らによる合同生物多様性フィールドワークショップ「第5回うみさわ会」開催に伴い、参加者各自の専門動物を一般市民にむけてレクチャーして頂いた。図鑑などでも目にする機会の少ない不思議な生き物たちの話や、生き活きと動物の説明をする若手研究者ら自身の姿に、参加者も生物多様性の楽しさを感じとってもらえたようだ。

- ・第二回奄美の生物多様性観察会「初冬の奄美で森の木を見る会」

2015年12月23日(水) 9:30~12:30、奄美自然観察の森にて

ガイド：鈴木英治(鹿児島大学総合研究博物館)、鶴川 信(鹿児島大学農学部)、山根正気(鹿児島大学総合研究博物館)、福元しげ子(鹿児島大学総合研究博物館)、鈴木真理子(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

奄美市教育委員会との共催にて開催した本年度二回目の観察会。オリジナルのスマートフォン用奄美樹木図鑑を片手に、奄美自然観察の森(龍郷町)敷地内にある樹木の同定方法を一般参加者らと共に実践しながら学んだ。生憎の雨模様の中での開催だったが、一般参加者はみな真剣に図鑑と植物を見比べ、自然観察を楽しんでいた。



第二回奄美の生物多様性観察会
(2015年12月23日)

・あまみワイルドライフセミナー 2週連続企画

2016年1月16日(土) 14:00~15:30、黒潮の森マングローブパークにて

「世界レベルにおける奄美・沖縄諸島先史時代の希少性」高宮広土(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

2016年1月23日(土) 14:00~15:30、黒潮の森マングローブパークにて

「野生動物をとことん追跡: バイオロギングで行動を記録して自然環境と人間の共生について 考える」依田 憲(名古屋大学環境学研究所)

奄美群島は世界的に見ても珍しい文化と自然環境が育まれてきた。環境省野生生物保護センターおよび奄美自然体験活動推進協議会との共同で二週連続での開催となった。先史時代の文化と最新技術によって知り得る現代の動物たちの生態という一見関連性の低い二つのテーマについて学ぶことで、現代人が自然とどのようにつきあい、どのように未来に残していくのか参加者が考える良い機会となった。



あまみワイルドライフセミナー
(2016年1月16日)

・特別セミナー「知りたい! 奄美の海を支えるサンゴたち」

2016年1月31日(日) 17:00~19:00、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて

「奄美大島におけるサンゴの変遷と保全活動」興 克樹(奄美海洋生物研究会)

「こんな場所に?! 内湾のサンゴ群落」藤井琢磨(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

「奄美のサンゴの多様性と分類」深見裕伸(宮崎大学農学部)

「クサビライシ類とはどんなサンゴか?」立川浩之(千葉県立中央博物館分館海の博物館)

島内外のイシサンゴ研究者が島で奄美分室を利用して共同調査を行う機会に、奄美大島で見られるイシサンゴ類の多様性に焦点をあてたセミナーを開催した。サンゴ礁生態系の基礎ともいえるイシサンゴ類だが、実は奄美大島周辺では多様性調査が行われた例は無く、本年度行われた予備調査でも奄美群島初記録となるだろう種が多く見つかるなど、今後の調査研究に期待が持てる。



特別セミナー (2016年1月31日)

・奄美分室で語りましょう(島嶼研勉強会)

第6回: 2015年10月8日(木) 17:30~19:00、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて

「奄美群島におけるサンゴ礁保全」興 克樹(奄美海洋生物研究会)

「ハナガササンゴ属の分類と系統」北野裕子(宮崎大学テニユアトラック推進機構)

「サンゴ礁生物の北上に関する研究」安田仁奈(宮崎大学テニユアトラック推進機構)

第7回: 2015年12月21日(月) 17:30~18:30、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室にて

「自動撮影カメラによる野生動物研究の実際—ニホンヤマネからアジアゾウまで—」安田雅俊(森林総合研究所九州支所)

不定期開催で、研究者や一般市民が飲み物片手に肩肘張らずに集い語らい、教養を深める場として開催している小規模勉強会、「奄美分室で語りましょう」。2015年度下半期には、分室への訪問機会があった学外研究者らに話題提供をお願いし、海と陸、それぞれの動物に関して教養を深めた。



奄美分室で語りましょう
(2015年10月8日)

・島嶼研研究会ネット中継会

島嶼研郡元キャンパスで定期開催される研究会のインターネット中継を行っている。2015 年 10 月から 2016 年 2 月の間に計 4 回開催し、一般参加の方からの質疑も行われるなど、毎回盛況となった。

< 奄美分室関連新聞掲載記事（平成 27 年度） >

2015 年 4 月 21 日	南海日日新聞 p1「奄美市に島嶼研究センター分室」
2015 年 4 月 21 日	南日本新聞 p1「鹿大が奄美に拠点 専任教授ら 4 人常駐」
2015 年 4 月 22 日	奄美新聞 p1「鹿大研究センター奄美分室設置 25 日に記念式典・講演」
2015 年 4 月 26 日	南海日日新聞 p1「群島の総合研究拠点が開所 世界遺産も視野に」
2015 年 4 月 26 日	奄美新聞 p9「奄美の情報世界に発信、分室記念鹿大教授講演」
2015 年 4 月 26 日	奄美新聞 p1「生物多様性の解明・保全へ 研究センター奄美分室開設」
2015 年 4 月 26 日	南日本新聞 p29「情報発信基地に 鹿大奄美拠点施設で設置式」
2015 年 4 月 27 日	南海日日新聞 p3「鹿大の奄美拠点開設 相互連携による活性化期待」
2015 年 5 月 8 日	日本経済新聞 p31「奄美振興 鹿大が奮闘 成果基に助言、交流機能も」
2015 年 8 月 30 日	南海日日新聞 p9「ウミガメ情報交換会、奄美市で開催」
2015 年 9 月 27 日	奄美新聞 p1「目で見て触って奄美の生き物学ぶ 住用の干潟で観察会」
2015 年 10 月 29 日	南海日日新聞 p8「高宮教授（鹿大）論文、国際誌 貝塚時代に狩猟採集民」
2015 年 10 月 29 日	奄美新聞 p11「狩猟文化の可能性 鹿大高宮教授 陸海両面で豊富な食料資源」
2015 年 11 月 8 日	南海日日新聞 p9「豊かな奄美の海再認識 若手研究者ら特別セミナー」
2015 年 11 月 8 日	奄美新聞 p9「海中の知らない動物学ぶ 若手研究者の成果発表」
2015 年 11 月 16 日	南海日日新聞 p9「島内遺跡の価値再認識 シンポ境界領域のダイナミズム」
2015 年 11 月 21 日	南日本新聞 p12「鹿大島嶼研、分室設置から半年 奄美研究の充実へ始動」
2015 年 11 月 29 日	南海日日新聞 p1「生息環境は良好か 龍郷湾のセンバイサンゴ群落調査」
2015 年 11 月 29 日	奄美新聞 p1「浅い水深でセンバイサンゴ 珍しい事例、学術的調査へ」
2015 年 12 月 24 日	南海日日新聞 p8「デジタル図鑑使い樹木観察 鹿児島大分室など主催」
2015 年 12 月 25 日	奄美新聞 p8「スマホ用の植物図鑑で検索 自然観察の森で観察会」
2016 年 1 月 1 日	奄美新聞特別版 p18「研究材料の宝庫」「少ない奄美で報告の生物」「専門機関と地域の近さ」
2016 年 1 月 17 日	朝日新聞 p35「奄美・沖縄 特異な先史に光 鹿児島大学教授高宮広土さん」
2016 年 2 月 2 日	奄美新聞 p9「初記録された種も 奄美近海サンゴ調査報告」
2016 年 2 月 3 日	南海日日新聞 p7「海の豊かさ再認識 奄美市でサンゴ特別セミナー」
2016 年 2 月 5 日	南日本新聞 p2「かお 奄美大島で海洋生物を研究する藤井琢磨さん」
2016 年 2 月 11 日	南海日日新聞 p8「島嶼研客員教授が特別授業 島の課題と可能性探る」
2016 年 2 月 11 日	奄美新聞 p9「島の魅力生かした商品開発を 島嶼研究のロイルさん」
2016 年 2 月 21 日	南海日日新聞 p1「奄美の魅力再認識 生物多様性テーマにシンポ」
2016 年 2 月 23 日	奄美新聞 p9「奄美の生物多様性理解 研究者ら講演・パネルディスカッション」

< 奄美分室来訪者数 >

のべ 238 名（2015 年 9 月 1 日～2016 年 2 月 20 日）

～学生島体験！vol.2～ 「奄美調査の憂鬱と期待」

石貫泰三 （鹿児島大学理工学研究科博士後期課程一年）

奄美調査へ行くときはいつも憂鬱だ。約十一時間の船旅の後、レンタカーを借り、船酔いも治らないうちに調査に出発する。

奄美の森には危険な生物が生息し、常に命の危険に晒される。私は鹿児島大学に所属し奄美大島の森林の研究を行っている。調査をするなかで天敵と言える生物が2種類いる。ハブとブユだ。ハブは知られている通りだが、ブユはハブより厄介だ。羽音もなく近づき、刺されればハチに刺されたように腫れる。多く刺されるとアナフィラキシーショックを起こし、高熱が出ることも



日本一美しいといわれるアマミシカワガエル

もある。ブユに大量に刺され後輩が高熱を出したときには改めて調査の危険性を感じた。

しかし危険な出会いばかりではない。二度目の調査では昼にも関わらず野山を素早く駆けるアマミノクロウサギを見つけた。またブユの多い森林では、湿度が高いのだろう木のウロに潜むイシカワガエルを見つけた。イシカワガエルは森の中では見つけることが非常に難しく、その背景に溶けこむ模様は調査を中断し撮影会を始めるほど美しかった。

こういった出会いが苦労も忘れさせ、また私を奄美大島の森へと向かわせる。いつも憂鬱な気分とほのかな期待のなかでまたフェリーに乗り、奄美大島へと調査に向かう。

編集後記

一年間の新聞記事ストックを見ながら、奄美分室でも色々あったなと感慨ひとしお。しかし、家族から「最近、海に行かなくなったね」と一言。街と自然が近い事は奄美大島の魅力の一つ。心機一転、フィールド研究に猛烈に邁進したいと思います。

藤井琢磨

アマミノクロウサギの糞を拾いに林道にかよった日々。雨の日も晴れの日も。ある日、落ち込んでいて気配を消しすぎたのか、ぼんやりする私の目の前をイノシシの親子が通り過ぎて行ったのは、忘れられない光景です。まだまだ調査は続きます。

鈴木真理子

島嶼研分室だより No. 2

平成 28 年 3 月 16 日発行

鹿児島大学

国際島嶼教育研究センター奄美分室

〒894-0032

鹿児島県奄美市名瀬柳町 2-1

TEL: 0997-69-4852 FAX: 0997-69-4853

E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp

<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/>

表紙写真：金作原への林道から奄美大島の山なみを望む。（撮影：2015 年 4 月 27 日、鈴木真理子）

ISSN: 2189-793X